静かなる羅列

横光利一

一

Ｑ川はその幼年期の水勢をもつて鋭く山壁を浸蝕した。雲は濃霧となつて溪谷を蔽つてゐた。山壁の成層岩は時々濃霧の中から墨汁のやうに現れた。濃霧は川の水面に纏りながら溪から溪を蛇行した。さうして、層々と連る岩壁の裂け目に浸潤し、空間が輝くと濃霧は水蒸気となつて膨脹した。

Ｑ川を挾む山々は、此の水勢と濃霧のために動かねばならなかつた。

その山巓の屹立した岩の上では夜毎に北斗が傲然と輝いた。だが、その豪奢を誇る北斗はペルセウスの星

が、刻々にその王位を掠奪しようとして近づきつゝあることには気附かなかつた。その下で、Q川は隣接するS川と終日終夜分水界の争奪に孜々としてゐた。

二

Q川の浸蝕する狭隘な溪谷へは人々の集団は近づいて来なかつた。それにひきかへ、S川の穏やかな溪谷には年々村落が増加した。

その国土の時代では、久しく天下に王朝時代が繁栄した。そのため、彼らの圧制は日毎に民衆の上に加はつた。

Q川は地質時代の軟弱な地盤を食ひ破つた。さうし

て、その河口にひとり黙々として堆積層のデルタを築き上げてゐるとき、その国土では、遂に鬱勃としてゐた民衆の反抗心が王朝に向つて突激を開始した。

　民衆と王朝の激烈な争闘は続けられた。王朝はその久しい優惰のために敗北した。彼ら一党は民衆のために虐殺された。さうして、僅かに残つた数人は人目を忍んで人跡稀なＱ川の濃霧の中へ逃げて来た。

　彼らは武装を解いた。山々は嶮峻に彼らを守りながら季節に従つて柔かに青葉を変へた。彼らは高い山壁の傾斜層に細々とした径（みち）をつけた。さうして、彼らは渓流を望んだ岩角でひそかに彼らの逞しい子孫を産ん

でいつた。

三

Q川とS川との分水界の争奪は益々激烈になり出した。S川は恐らく数回の勝利を物語りながら、その河口に壮大な砂の堆積層を築いていつた。此のため、S川の浸蝕力は、Q川に比べてはるかに緩漫になり出した。だが、S川のその堆積層のデルタは、徐々として海面から壮麗に浮かび上つた。新しい滑かな処女地が河口を挾んで生れて来た。人々の集団はデルタの平野の上に訥朴な巣を造つた。彼らは純然たる土民であつた。彼らはその国土の支配者に屈服しながら、耕作し

なければならなかつた。だが、彼らの国土の支配者は既に民衆ではなかつた。

曾て、王朝は民衆に顚覆された。しかし王朝を顚覆さした民衆は、再び彼らの野蛮な総帥のために支配されねばならなかつた。さうして、封建時代が堅実に彼らの国土の上へ君臨した。軈て、Ｓ川の造つた開析デルタの上へ一つの城が築かれた。

四

Ｑ川の活動は幼年期から壮年期に這入つていつた。その水勢の浸蝕力は横に第三紀層の緩斜層を突き崩して拡つた。此のため、Ｓ川へ流れる分水界の水量は、

その均衡を破つて次第にＱ川の水流に誘惑された。

Ｑ川を繞る綿々とした濃霧の中では、王朝時代の残党がその子孫を美しく繁殖させた。しかし、彼らは彼らの祖先が曾つて民衆に顚覆された事実と怨恨とを次第に忘れていつた。さうして、彼らの繁殖力はその屈辱の忘却力に従つて溪谷を下り、濃霧の中からＱ川の洋々たる河口へ向つて拡がり出した。彼らはいづれの国王にも属さなかつた。しかし、彼らは彼らを繁殖せしめた直系の家族のために支配されねばならなかつた。

そこで、Ｑ川の流域には、隠然たる豪族がその団結力を延ばし出した。彼らはＳ川のデルタの上に生活する

土民の集団に対抗するため、彼らもまたＱ川の河口の岩角に尖鋭な一つの城を築き上げた。
だが、彼らは豊饒なＳ川の住民の生活力とその貧しい力を争ふことは出来なかつた。このため、彼らは彼らの生活力の主力を武力に向けた。

五

Ｑ川とＳ川との水流の争闘が激しくなるに従つて、その各自の流域に築造された二つの城の争闘も激しくなつた。しかし、Ｑ川の豪族の城が、しば〳〵Ｓ川の土民の城に圧迫されつゝあつたにも拘らず、川それ自身の争闘は絶えず反対の現象を示してゐた。Ｑ川の浸

蝕力は白堊紀の地層を食ひ破つて益々深刻になつていつた。Ｓ川の浸蝕力は、河口の堆積デルタが確乎とした地盤となるに従ひ、益々その力を弱めていつた。さうして、Ｑ川はＳ川の支流の水を滔々と奪ひ出した。

六

此のＳとＱとの二川の争奪し合ふ現象を、絶えず眺めてゐたのは北斗であつた。だが、北斗それ自身は、遅々として天界で滅んでゐた。さうして、ペルセウスの星は、終に北斗の位置を掠奪した。新しい北斗は、再び争闘し合ふ此れらの山河の上で輝き出した。

Ｑ河口の城の人々は、Ｓ河口の城主の久しい圧迫か

ら跳ね起きるときが近づいた。何ぜなら、Ｑ川の支流は完全にＳ川の支流を掠奪し終へたからである。此のため、Ｓ川の本流は、浸蝕された醜いケスタの段階を露はしながら、渇れ果てゝ茫々たる野になつた。かくして、Ｓ川の水量を奪つたＱ川はひとり益々肥えていつた。それと同時に今迄Ｓ河口で行はれた通商は尽くＱ河口へ集り出した。Ｑ城の貧しい財政はその河口と共に膨脹した。新らしい生産が始つた。新らしい武器が購入された。さうして、Ｑ城の拡大された新らしい生活力はＳ城に変つて、逆に彼らを圧迫し始めた。

Ｑ城の豪族の勢力は、日に日にその領土を拡張した。Ｑ河口に集る人々の集団は年々に増加した。その村落は市街になり、その市街は港になつた。さうして、Ｓ城との小さき争闘は豊富な武力と財力とを以つて続けられた。

Ｓ城の市民はその疲弊の原因をＳ川の枯渇と知つた。彼らは川水の復活を計るため、彼らの財力を専心Ｓ川の開鑿に用ひ出した。

Ｑ城の市民は彼らの開鑿を妨害するため、Ｑ川へ流れる上流の支流を堅固な石垣で尽くせき止めた。しかし、Ｓ城の市民は忽ち彼らの石垣を突き崩した。

一大戦闘が二城の間に開始された。軍馬の集団が日毎に、川上と川下とで殺戮し合つた。しかし、Q城の嶄新な武力は終にS城を惨虐に圧倒した。

八

Q川がS川の水量を掠奪したと同様に、Q城はS城を掠奪した。S城はQ城の藩屛として、Q城の直属の家臣がその新らしい城主にされた。

此の横逸したQ城の勢力は、S川の流域で新しい生命を産んでいつた。此れらの生命はSとQとの混種となつて汎濫した。従つて彼らS城を守る系統は漸次独特の体系をとつて若々しく発達し始めた。

それと同時に、Ｓ城の市民はＳ川の復活を願ひ出した。彼らはＱ城の城主に向つて、しば〳〵Ｓ川の支流の石垣の撤廃を懇願した。しかし、Ｑ城の城主はＳ城の勢力の擡頭を恐れねばならなかつた。Ｓ川が常に枯渇してゐる限り、Ｓ城は常にＱ城の藩屏として苦しき忠実を守らねばならなかつた。さうして、Ｑ城はその拡充された勢力と共に、次第にＳ城に対して横暴を極めていつた。

九

日月は経つた。北斗となつたペルセウスは、その天界でひそかにアンドロメダの星のために狙はれてゐた。

下界ではかの横暴なＱ城の城主の勢力が、年々Ｓ城の市民を苦しめた。Ｓ城の市民の反逆心は地にひれ伏しながら鬱屈した。

しかし、Ｑ城の横暴が、Ｓ川をせき止めてゐる堅牢な石垣と等しく続いてゐるとき、Ｑ川の横暴もまた続いた。Ｑ川はＳ川の水源を集めて貪婪になればなるほど、その尨大な浸蝕力は徐々として自身の河口にそれだけ高く堆積物を築いてゐた。此の堆積物はＱ城の市民にとつては癌であつた。彼らの誇つた港湾は浅くなつた。海外の船舶は彼らの領土から隣国の港へ外れ始めた。

此の現象は自然とＱとＳの二城を相殺さすことは明かなことであつた。

十

遂に、Ｑ城の城主はＳ川の支流を止めた石垣の撤廃を命令した。何ぜなら、Ｑ城はＱ川の浸蝕力の運ぶ堆積物を調節しなければならなかつたからである。

Ｓ川は復活し始めた。Ｑ川がその河口に高く堆積層のデルタを築いたそれだけ川の水流は緩漫になつてゐた。従つて、Ｓ川が再びＱ川の水源を奪回するのは容易であつた。それにＳ川の渇れた川道は前から十分の準備を以つて開鑿せられてあつた。Ｓ川は日々の雨量

と共に俄然として奔流した。それは恰もS城の市民の鬱屈してゐた反抗心に、着々として豊富な資力を注ぎ込んでゐるのと等しかつた。

S川の流域は豊饒になり出した。S城の市民は黙々として産業の拡張をし始めた。生産物は増加した。通商が勃興した。さうして、彼らは暗黙の中にQ城の支配下から独立しようとして活動した。

十一

QとSとの二川の浸蝕力は均衡を保つて来た。だが、Q川はその河口の堆積層の肌を、漸次に海面から胸のやうに擡げ出した。新らしい海岸平野は、古層の横に、

モーバンを描きながら生れて来た。市街はそれらの段階デルタの上へ輝やかしく拡がつた。それと同時に、Q川の浸蝕力は益々緩漫になつて来た。

しかし、S川はそれとは全く反対の状況を示し始めた。S川は曾ては前にその水源をQ川に掠奪されたごとく、今は逆にQ川の分水界の水線を奪ひ出した。浸蝕力は奔騰した。さうして、その河口の古層デルタの水平層へ二輪廻形の累層を新鮮な上着のやうに爽々しく着始めた。しかし、S城の市民は、Q城の市民が、その河口の活動状態を忘れてゐる暇に、絶えずS川の河道の開鑿に注意した。

Ｓ城の勢力は勃然と擡頭した。Ｑ城の市民は、自身を亡すよりも、Ｓ城を滅亡さす予想の方がより彼らにとつては幸福であつた。

十二

Ｑ城の城主は藩屏たるＳ城に対して再びＳ川の支流を堰き止めることを命令した。しかし、Ｓ城の城主は、今は断乎として横暴な命令を拒絶した。

Ｑ城からは軍兵がＳ川の上流へ向つて進軍した。彼らは城主の意をもつて、再び石垣を築くために単独の行為をとつた。

それに応じてＳ城からは、直ちに軍兵が出動した。

戦端が濃霧の中で開かれた。ＱとＳとの河水は絶えず血液と油と屍とを浮べて流れ出した。

しかし、Ｑ城の軍兵は純然たる王朝時代の残党から成つてゐた。従つて祖先を異にするＳ城の混種の軍兵よりもその団結力は強かつた。久しい二軍の接戦から勝ち得る者は、より強固な団結力の所有者に違ひない。Ｑ城の軍兵は次第にＳ城へ攻め襲せた。さうして、Ｑ軍は終に再び勝つた。

十三

Ｓ城の軍兵はその粗大さの故に遂に破れた。しかし、Ｑ城はＳ城からその生命の原泉であるＳ川の水を奪ふ

ことは出来なかつた。何ぜなら、Q城の城主は、S城の市民の間に、彼らの必死の反抗心を育てることを喜ぶことが出来なかつたからである。

S川は依然として流れることを赦された。だが、S城の城主は反逆者として殺された。さうして、Q城の城主は、再びS城に新しい城主を与へなかつた。かうして、S城の市民は永久に彼らからその反逆の武器を奪はれた。

SとQとの二城の闘争は断絶した。S城は常にQ城の支配の下に鎮つてゐなければならなかつた。だが、城主の亡んだS城の市民の間では、ひそかに個人の経

済活動が分裂しながら繁しくなつた。商人がひとり財力を蓄積した。個人と個人の争闘が激烈になり出した。

しかし、Q城の城主にとつて、此の現象は喜ぶべきことであつた。何ぜなら、個人の争闘が激しくなればなるほど、彼らはQ城に対する怨恨の団結力を鈍らせて行くにちがひなかつたからである。いかに個人が勢力を貯へたとて、一国の城主に勝てないことは分つてゐた。

十四

SとQとの二城の争闘が根絶されたときには、天下は再び王朝の勢力を挽回した。曽て彼らの国主を担い

で王朝に反抗した民衆は、今は彼らの国主を捨てて王朝を担ぎ出した。封建制度が亡び出した。民衆は彼らの領主から解放された。領主は民衆の一人となつて蹴落された。

　さうして、Ｑ城の城主もまた、不意に彼の使役した一介の土民と等しい一線へ墜落した。

だが、此の急激な変遷にひとり利益を得たのは商人であつた。Ｓ城の市民はＱ城のために久しくその武力を奪はれてゐた報酬として、彼らは商人となつて莫大な私財を貯へてゐた。此のためＳ城の市民の財力は、個人としてはるかにＱ城の市民を凌駕してゐた。領主

から解放されたQとSとの市民達は、突如としてその私財の多寡に従つて個人の権力を延ばし出した。

十五

Ｓ市はQ市を圧倒した。Ｓ市は私財を糾合した力に依つて、ひとり益々彼らの生産力を膨脹させた。彼らの生産が増せば増すほど、彼らの私財は増加した。彼らの私財が増せば増すほど、彼らの生産力は膨脹した。今は、Q市はＳ市の勢力に対する唯一の妨礙として、Ｓ川の閉塞を命令することが出来なかつた。彼らはただ貧しきままに、正しき伝統と品位とを誇らかに尊重してゐなければならなかつた。

しかし、Ｓ市の海岸平野の上には珍奇な工場が竝び出した。Ｓ市の市民は、その混種の粗雜さを以つて新らしき文化を建設し始めた。彼らには傳統はなかつた。彼らには因習がなかつた。彼らは新らしき祖先であつた。彼らは彼らの力のまゝに、その生產と財力とを擴張すればそれで良かつた。彼らは彼らの障害となる凡ゆる古き習性と形式とを破壞し始めた。彼らは自由であつた。彼らには拘束がなかつた。彼らは氣品と階級を蹴倒した。彼らは團結を憎んだ。彼らは個性を愛した。彼らは分裂した各々勝手な情熱を以て橫に擴がつた。

さうして、Ｓ市の市長は忽ちの間にＱ市の市民を併呑した。

十六

Ｓ市はその財力の豊かさを以つて、絶えずＳ川の開鑿を行つた。だが、Ｑ市はその財力の貧しさの故に、絶えずＱ川の堆積物を放任した。このため、Ｑ川の浸蝕力の鈍るに従ひ、Ｓ川の浸蝕力はいつまでも増大した。Ｓ川の浸蝕力が増せば増すほど、ますますＱ川はＳ川にその河水を掠奪されていつた。しかし、Ｓ市の膨脹力はＳ川の膨脹力よりも激しかつた。今やＳ市の要求する河水は、Ｓ川の水量だけでは不足となつた。

さうして、Ｑ川は遂にＳ河を助けるために、初めてその支流を閉塞された。

だが、Ｑ市民はＳ市民に向つて反抗することは出来なかつた。何ぜなら、Ｑ市民それ自身、今はＳ市民であつたから。かくして、ＳとＱとの市街は、争奪し合つた二川のために一大都会となつて来た。

十七

ＳＱの開析デルタの上には工場が陸続として建ち並んだ。鉄道の数は増していつた。Ｓ川の電力は馬力を上げた。船舶の帆檣は林立した。さうして、全市街は平面から立体へ、木造から石造へ。営舎が、官衙が、

工場が、商店が、校舎が、劇場が、会社が、寺院が、橋梁が。ガラスと金属の光波は絶えず空間で閃き合ひ、発動機の爆音と鉄槌との雑音が潑溂として交錯した。

しかし、此の壮大な市街を構成したものは財力であつた。所詮ＳＱの市民は財力の下には屈伏しなければならなかつた。さうして、その財力の投資者であつた商人達は、ひとりますます民衆を使役した。市街は投資者の市街となつた。民衆の労役は彼らのための奉仕となつた。自由と平等は彼らのために奪はれた。Ｓ川の河水は、徒に彼らのために誇らしく流れてゐるのと等しかつた。

労働者達は自身を使役する財力のために青ざめ出した。彼らの疲労はます〳〵彼らを苦しめる財力を助けることとなり出した。しかし、彼らは彼ら自身を生存させるその市街から逃れることは出来なかつた。さうして、彼らは彼らの勢力をもつて築き上げるその大市街が尨大になればなるほど、その大都会の全重力を彼らの肩に背負つて行かなければならなかつた。そこで、初めて最も平等を重んじたＳＱの市民達も、その各自の財力に従つて、必然的に階級が存在してゐることを意識し始めた。

十八

ＳＱ市の無産者達は団結した。彼らは彼らの労力がいかに有産者達にとつて尊重せられるべきかを警告するために反抗した。

資産家達はその財力の権力を用ひて圧迫した。

無産者達は擡頭した。

一大争闘がデルタの上で始つた。

集団が集団へ肉迫した。

心臓の波濤が物質の傲岸に殺倒した。

物質の閃光が肉体の波濤へ突撃した。

市街の客観が分裂した。

石と腕と弾丸と白刃と。

血液と爆発と喊声と悲鳴と咆哮と。
疾走。　衝突。　殺戮。　転倒。　投擲。　汎濫。
全市街の立体は崩壊へ、――
平面へ、――
水平へ、――
没落へ、――
色彩の明滅と音波と黒煙と。
さうして、ＳＱの河口は、　再び裸体のデルタの水平
層を輝ける空間に現した。
大市街の重力は大気となつた。
静かな羅列は傷ける肉体と、歪める金具と、　掻き乱

された血痕と、石と木と油と川と。

（「文芸春秋」大正14年7月号）

底本：「短篇小説名作選」現代企画室
　１９８１（昭和56）年４月15日第1刷発行
　１９８４（昭和59）年３月15日第2刷発行
※「曾て」と「曽て」、「S川」と「S河」、「並」と「竝」の混在は底本通りにしました。
入力：土屋隆
校正：門田裕志、小林繁雄
２００４年1月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。